花と緑の国際博覧会
「淡路花博ジャパンフローラ2000」から
国際博覧会の今後を考える

第一部／博覧会の歴史と実態

編集部：Mt.1

目　次

１．はじめに
２．国際博覧会について
３．地方博覧会について
４．博覧会の跡地利用

第二部へ

１．はじめに

博覧会と聞いて、どんなイメージを持たれるだろう。

30代以上であれば大阪・沖縄万博、20代の人はつくば博・大阪花博、10代になると自分が住んでいる地域のバブリーだが盛り上がりに欠けた博覧会イベントを思い浮かべているのではないだろうか。

この博覧会の歴史は意外と古く、日本での開催は、明治時代にさかのぼる。その後、現在に至るまで、おびただしい数が開催され、産業や流通に新しい刺激を与え続けてきた。それは、景気刺激、地域活性の起爆剤効果、すなわち博覧会効果が定着できたことによる。しかし、現代では肝心のその効果が疑問視されるようになった。「金食い虫だ」「一過性だ」「税金を使うな」「内容はどこも同じだ」･･･等と批判の声に主催者たちの意気は上がらない。

そこで、今回はこの博覧会の歴史を整理しながら、逆風の下、好評を博している「淡路花博」の取材結果を中心に、博覧会の持つポテンシャリティを再考してみる。

第一部は「博覧会の歴史と実態」として、国際博覧会・地方博覧会を時系列で整理した。次いで第二部は「淡路花博ジャパンフローラを訪ねて」とし、淡路花博について、その開催背景から実際に訪れてみての現状レポートを掲載する。

２．国際博覧会について

日本ではじめての国際博覧会は、1970年開催の「日本万国博覧会（通称・大阪万博）」であるが、国際博覧会の第１回は1851年イギリスのロンドンで開催されている。このころ我々はまだ江戸末期の動乱にあったのだが、先進国の欧州では近隣諸国と連携したイベントを開催していたわけである。

当時の博覧会の目的といえば、植民地の特産物や装飾品・貴金属などを展示し、国内外に自国の支配力アピールをすること。さらに、会場設営とあわせて進められた都市の再開発手法や成果をＰＲしようという２つの目的があった。これを代表するのがフランス・パリ博で、再開発と併せて建設したエッフェル塔、グラン・パレなど博覧会で利用した施設を恒久的に都市のシンボルとして使用している。

その後、国力高揚・誇示からテーマに応じた秩序ある国際博覧会としての再生が図られ、1928年に「国際博覧会条約」を締結。日本は1965年に加入し、'99年現在47カ国が加盟している。条約では、国際博覧会に関する規則、手続き等を規定した。つまり国際博覧会を開催計画する場合、条約に基づき、開催希望国政府は博覧会国際事務局（BIE）（注１）に対して開催申請を行った後、総会での採決を経て正式な開催承認を得ることが必要となっている。また、1993年12月のBIE総会において、国際博覧会は、2000年以降の開催は５年周期、2000年のドイツ万博以降2004年

末まで、開催は認めないと決定した。

この決定により、毎年のように開催される博覧会（表１）に参加国が予算と準備に追われ、ひどい時は開幕日にまだ工事中のパビリオンがあるなどの間に合わせ状態が回避され、質的向上が図られるようになった。
さて、日本初の国際博覧会「大阪万博」を振り返ってみよう。時は高度成長のまっただ中の1970年大阪・千里で開催された。目玉は、人類初の月面着陸に成功したアポロ11号が持ち帰った「月の石」で、展示されていたパビリオンは、連日入館待ち２時間以上の長蛇の列で大混雑した。期間中訪れた人は6,400万人を数え、三波春男が歌うテーマソング「世界の国からこんにちは」は、当時はだれでも口ずさむことができるほど大ヒットし、この万博に日本中が盛り上がっていた。
この成功を期に、1975年には、その３年前に日本に復帰した沖縄県で「沖縄国際海洋博覧会（通称・沖縄博）」、続く1985年にはつくば学園都市で「国際科学技術博覧会（通称・つくば博）」が、さらに大阪万博から20年後の1990年、再び大阪で「国際花と緑の博覧会（通称・花博）」が開催された。そして、2005年には、愛知県で「新しい地球想像：自然の叡智（えいち）」をテーマに「21世紀万国博覧会（通称・愛知万博）」の開催が予定されている。

注１：博覧会国際事務局（BIE）／国際博覧会条約の適用を監督・確保するために設立された国際機関（所在地：パリ）。構成員は条約締約国政府。（我が国は、政府代表として、在仏日本大使館公使、同商務担当参事官及び通産省商務室長を任命。）総会のほか、執行委員会、事務局等により構成。
総会議長：Ｏ・フィリプソン（デンマーク）
事務局長：Ｖ・Ｇ・ロセルタレス（スペイン）
参考：通産省新しい２１世紀型国際博覧会の開催について（概要）（国際博覧会予備調査検討委員会報告書）
http://www.miti.go.jp/past/b51204d1.html

（表１）**■国際博覧会一覧**

年	開催地	名称	テーマ・その他
1851	イギリス・ロンドン	ロンドン万国博覧会	第１回、600万人入場
1862	イギリス・ロンドン	ロンドン万国博覧会	日本から渋沢栄一ら使節団を派遣、620万人入場
1867	フランス・パリ	パリ万国博覧会	日本が初参加、900万人入場
1873	オーストリア・ウイーン	ウイーン万国博覧会	日本が本格的に参加、725万人入場
1876	アメリカ・フィラデルフィア	フィラデルフィア万国博覧会	独立百周年記念国際博覧会、980万人入場
1878	フランス・パリ	パリ万国博覧会	1,600万人入場
1889	フランス・パリ	パリ万国博覧会	エッフェル塔が人気を呼ぶ、3,200万人入場
1900	フランス・パリ	パリ万国博覧会	“花の都パリ”の評価を高める、5,100万人入場
1934	アメリカ・シカゴ	シカゴ万国博覧会	「進歩の１世紀」統一テーマが初採用、4,900万人入場
1935	ベルギー・ブリュッセル	ブリュッセル万国博覧会	「民俗を通じての平和」、2,600万人入場
1937	フランス・パリ	パリ万国博覧会	「近代生活における技巧と技術」、3,200万人入場
1939	ベルギー・リエージュ	水と技術の国際博覧会	「水と技術」
1939	アメリカ・ニューヨーク	ニューヨーク万国博覧会	「明日の世界と建設と技術」、4,500万人入場
1947	フランス・パリ	都市計画と居住の国際博覧会	「明日の世界と建設」

1951	スウェーデン・ストックホルム	スポーツの国際博覧会	「スポーツ」
1951	フランス・リース	繊維の国際博覧会	「繊維」
1953	イスラエル・エルサレム	砂漠の征服の国際博覧会	「砂漠の征服」
1953	イタリア・ローマ	農業の国際博覧会	「農業」
1954	イタリア・ナポリ	航海の国際博覧会	「航海」
1955	イタリア・トリノ	スポーツの国際博覧会	「スポーツ」
1955	スウェーデン・ヘルシングボルイ	応用技術の国際博覧会	「現代の人間環境」
1957	西ドイツ・ベルリン	建築の国際博覧会	「建築」
1958	ベルギー・ブリュッセル	ブリュッセル万国博覧会	「科学文明とヒューマニズムーより人間的な世界へのバランスシート」、4,100万人入場
1962	アメリカ・シアトル	21世紀大博覧会	「宇宙時代の人類」、960万人入場
1967	カナダ・モントリオール	モントリオール万国博覧会	「人間とその世界」5,000万人入場
1968	アメリカ・サンアントニオ	ヘミス・フェア世界博覧会	「アメリカ大陸における文化の交流640万人入場」
1970	日本・大阪	日本万国博覧会	通称：大阪万博、「人類の進歩と調和」、6,400万人入場
1974	アメリカ・スポケーン	スポケーン国際環境博覧会	「汚染なき進歩」、560万人入場
1975	日本・沖縄	沖縄国際海洋博覧会	通称：沖縄博、「海ーその望ましい未来」、350万人入場
1982	アメリカ・ノックスビル	ノックスビル国際エネルギー博	「エネルギーは世界の原動力」、1,100万人入場
1984	アメリカ・ニューオリンズ	ニューオリンズ国際河川博	「川の世界ー水は命の源」730万人入場
1985	日本・筑波	国際科学技術博覧会	通称：つくば博、「人間、居住、環境と科学技術」、2,000万人入場
1986	カナダ・バンクーバー	バンクーバー国際交通博覧会	「動く世界、ふれ合う世界」、2,200万人入場
1988	オーストラリア・ブリスベーン	ブリスベーン国際レジャー博	「技術時代のレジャー」、1,600万人入場
1990	日本・大阪	国際花と緑の博覧会	通称：花博、「花と緑と人間生活の調和」、2,300万人入場
1992	スペイン・セビリア	セビリア万国博覧会	「発見の時代」、4,200万人入場
1992	イタリア・ジェノバ	ジェノバ国際船と海の博覧会	「クリストファー・コロンブス：船と海」、170万人入場
1993	韓国・大田	大田国際博覧会	「発展のための新しい道」、1,700万人入場

1998	ポルトガル・リスボン	リスボン博覧会	「海－未来への遺産」、1,000万人入場
2000	ドイツ・ハノーバー	ハノーバー万国博覧会	「人、自然、技術」http://www.expo98.pt/
2005	日本・愛知	21世紀万国博覧会	通称：愛知万博、「新しい地球創造 ：自然の叡智(えいち)」http://www.expo2005.or.jp/

次ページへ

空間通信
トップ

３．地方博覧会について

最初の国際博覧会は、大阪万博であるが、そもそも日本における最初の博覧会は、1871年に欧米の博覧会を模して開催した「京都博覧会」がルーツとなる。その翌年には東京で「湯島聖堂博覧会」が文部省主催で開催され、その後日本全国至る所で開かれるようになった。つまり、我が国では地域を限定した地方博が中心で、これが第１次博覧会ブームを呼ぶことになった。

戦後は、1947年の「福山産業振興会」を皮切りに時勢を反映して、講和・復興・平和に関する博覧会が地方都市を中心に開催された。そして復興の勢いが高度成長を迎え、大阪万博・沖縄博の国際博覧会の大成功で、地方博についても気運盛り上がることになる。

その“爆発”が1981年の「神戸ポートピア」で、国際博覧会並のスケールで開かれた。この成功に刺激され、以降平成に至るまでの約10年間は、かつてない地方博覧会ラッシュとなった。（表２）
しかし、しょせんブームとは一過性のもの。1988、1989年のように年間15カ所で開催され（グラフ１）、目新しさもなくなったのか、目標来場者数に至らない博覧会も表れてきた。そこで、1988年通産省は、地域産業の進行や国際交流を推進するための地域の自主性・主体性に基づいた博覧会の開催を促進する「特定博覧会（ジャパンエキスポ）制度」を設けた。それでも、'90年代には常設型の大型アミューズメントレジャー施設やテーマパークのオープンが相次ぎ、一方で不況の影響から東京の都市博が中止となるなど、地域活性を目玉に企画・開催された地方博は、来場客数、収支も思わしくなく、その成功神話は崩壊していく。これは、地域活性よりも肝心の内容がその成否を決める“大競争時代”を迎えた結果であろう。

ところが、失敗は繰り返されるという当事者の熱意が報われたのか、最近その神話復活の兆しが見られている。例えば昨年開かれた「南紀熊野体験博」は、目標入場者数100万人のところ、310万人と大盛況に終わり、今年開催している「淡路花博」は、５月28日付けの神戸新聞によると、開幕65日目で入場者数が300万人を突破（目標の60％）するなど、主催者の予想を上回るにぎわいを見せているという。

来場者数が評価の全てではないが、博覧会そのものの開催リスクが指摘されるようになって久しい中、人気の要因は何なのか、興味がそそられるところである。

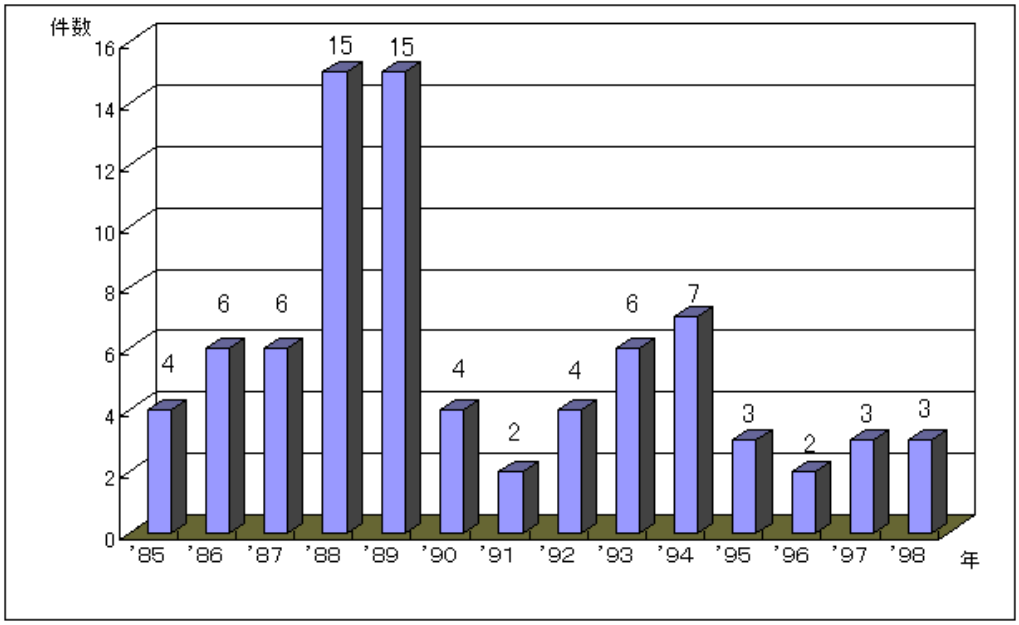
（表２）**■1980年以降の主な地方博覧会**

年	名称	開催地	データ他
1981	神戸ポートアイランド博覧会	神戸市神戸ポートアイランド	1,610万人入場、純益60億円
1987	葵博・岡崎87	愛知県岡崎市	
1987	'87世界古城博覧会	滋賀県彦根市	
1987	'87未来の東北博覧会	宮城県仙台市	
1987	天王寺博覧会	大阪市	248万人入場
1987	グリーンハーモニーさいたま '87	埼玉県大宮市	
1987	世界歴史都市博	京都市	
1988	'88 さいたま博覧会	埼玉県熊谷市	
1988	岡山県瀬戸大橋架橋記念博覧会	岡山県倉敷市	
1988	香川県瀬戸大橋架橋記念博覧会	香川県坂出市	

1988	ひょうご '88 北摂・丹波の祭典	兵庫県三田市他１市11町	
1988	なら・シルクロード博	奈良市	
1988	世界食の祭典1988	北海道札幌市	
1988	十勝海洋博覧会	北海道広尾町	
1988	ぎふ中部未来博覧会	岐阜市	
1988	青函トンネル開通記念博覧会	青森市	
1988	青函トンネル開通記念博覧会	北海道函館市	
1988	食と緑の博覧会いしかわ '88	富山県金沢市	
1988	飛騨高山　食と緑の博覧会	岐阜県高山市	
1988	食と緑の博覧会とちぎ '88	栃木県宇都宮市	
1988	第６回全国都市緑化フェア	愛知県名古屋市	
1989	サザンピア２１	鹿児島県	
1989	アジア太平洋博覧会	福岡県	
1989	静岡駿府博覧会	静岡県駿府市	
1989	'89 姫路シロトピア博	兵庫県姫路市	
1989	オランダフェスティバルダッハランド '89 大阪	大阪府堺市	94万人入場
1989	横浜博覧会YES'89	神奈川県横浜市	1,333万人入場（目標1,250万人）
1989	第21回全国菓子博覧会	島根県松江市	
1989	'89 海と島の博覧会・ひろしま	広島県	
1989	新潟食と緑の博覧会	新潟県	
1989	世界デザイン博覧会	愛知県名古屋市	1,518万人入場
1989	国際交流フェア（TIME '89）	三重県津市	
1989	世界おもちゃ博覧会	鳥取県	
1989	'89 グリーンフェアせんだい	宮城県仙台市	
1989	おみやげザ・ワールド山形100フェスティバル	山形県	
1989	甲府博覧会＋パンダ展	山梨県甲府市	
1990	'90 長崎「旅」博覧会	長崎県	189万人入場（目標150万人）
1992	富山博覧会（仮称ジャパンエキス	富山県	237万人入場

	ポ)		
1992	三陸・海の博覧会	岩手県	201万人入場
1993	信州博覧会	松本他	244万人入場
1994	世界都市博	東京都臨海副都心	中止
1994	世界祝祭博覧会	伊勢志摩	351万人入場
1994	世界リゾート博	和歌山県	289万人入場
1996	世界・炎の博覧会	佐賀県	255万人入場
1997	山陰・夢みなと博覧会	鳥取県	193万人入場
1997	国際ゆめ交流博覧会	宮城県	106万人入場
1999	南紀熊野体験博覧会	和歌山県	310万人入場
2000	ジャパンフローラ2000淡路花博	兵庫県淡路島	３／18～９／17、184日間、目標500万人http://www.jf2000.or.jp/
2001	山口きらら博	山口県	７／14～９／30、79日間、目標200万人http://www.pref.yamaguchi.jp/2001expo.htm
2001	北九州博覧祭2001	福岡県北九州市	７／４～11／４、124日間、目標200万人http://www.city.kitakyushu.jp/~k0401050/
2001	うつくしま未来博	福島県	７／７～９／30、86日間、目標200万人http://www.pref.fukushima.jp/miraihaku/

（グラフ１）**■地方博の開催件数の推移**



前ページへ　第一部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

花と緑の国際博覧会
「淡路花博ジャパンフローラ2000」から
国際博覧会の今後を考える

第二部／「淡路花博ジャパンフローラ2000」レポート

編集部：Mt.1

目　次

１．淡路花博の開催概要
２．バックグランド
３．訪問実態レポート
(1)導入アプローチ
(2)花の館（テーマ：人と花のコミュニケーション）
(3)国際庭園
(4)生産技術展示園（テーマ：園芸がひらく生活と産業）
(5)花と緑のライフスタイル館（テーマ：花と暮らしと住まい）
(6)テラスガーデン
(7)海のテラス、淡路・虹の花壇、花の中海
(8)淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」
(9)その他の夢舞台ゾーン
(10)「緑と都市（まち）の館」（テーマ：みどりの都市文化）
(11)「アジアショーケース」（テーマ：アジアン文化とのコミュニケーション）
４．まとめ
５．閉幕に際して

第一部へ

１．淡路花博の開催概要

【施設概要】
運営主体：国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000日本委員会」
（財）夢の架け橋記念事業協会
会場：兵庫県淡路島（淡路町・東浦町）
敷地面積：約96ha（東京ドーム約20個分）
メインテーマ：「人と自然のコミュニケーション」
交通：淡路I.C.から車で５分、東浦I.C.から10分
JR舞子駅からバスで15分（明石海峡大橋経由）
神戸中突堤～交流の翼港（船）で35分
関西国際空港～交流の翼港（船）で25分
明石港～岩屋港（明石フェリー）で20分

入場料金

券　種	区　分	入場料金（消費税込み） 平成12年３月18日～12年９月17日	備　考
普通入場券	大　人 シルバー 高校生 小中学生 幼　児	2,900円 2,000円 1,500円 800円 400円	
フローラパス （全期間通用入場券）	大　人 シルバー 高校生 小中学生	7,900円 5,400円 4,100円 2,200円	博覧会期間中有効。入退場が自由な入場券

	幼　児	1,100円	

開催期間：2000年３月18日～９月17日（184日間）
時間：９：30～18：00（７月１日～９月３日は９：30～21：30）
入場者数：９月５日時点612万人
目標入場者数：開催当初500万人、９月５日時点700万人
取材日：2000年６月21日（水）
URL：http://www.jf2000.or.jp/

広域マップ

２．バックグランド

兵庫県淡路島には、１市10町に約16万人が暮らしている。面積は595平方km。これは香川県のほぼ３分の１に相当する。1985年の鳴門大橋開通時は、約１千万人の観光客で賑わったが、その反動か、翌年は約700万人に落ち込む。それでも1990年には約800万人まで回復したものの、1995年には阪神大震災が起きた影響もあって約600万人まで落ち込んだ。

こうした観光動員をふまえ、兵庫県は明石海峡大橋の建設を地域活性化につなげようと1990年、長期計画「兵庫2001年計画」を作成。この中で淡路島開発の方針を「淡路らしさを生かした多彩な交流空間を作り、世界に開かれた公園島の創造を目指す」とうたった「淡路島国際公園都市」を構想・計画した。

このプロジェクトは、関西国際空港など大阪湾の埋め立てに利用した広大な土砂採取の跡地に植栽を施し、自然環境の回復と緑豊かな景観の創造を積極的に取り組もうとする環境創造型の開発事業である。具体的には、神戸淡路鳴門自動車道の淡路インターチェンジに隣接する約350ha（東京ドームの約74個に相当）の土地に、温室、ホテル、国際会議場などを備えた「淡路夢舞台」、「県立淡路島公園」、「淡路ハイウェイオアシス」、「淡路交流の翼港」のほか、「国営明石海峡公園」を整備して、大阪湾ベイエリアの一翼を担う交流拠点として2001年度までに全ての完成を予定している。

当初の計画では、「淡路夢舞台」の完成は、明石海峡大橋と同じ1998年の予定していたが、1995年の阪神・淡路大震災による被災の教訓から、従来の整備方針に加え「防災都市づくり」の理念を盛り込んだ基本計画・設計に見直して、2000年の今年にずれ込んでの完成となったのである。
その「淡路夢舞台」の完成を期に、これに隣接する96haのエリア（東京ドーム約20個が入る広大な規模）を会場に、プロジェクトのＰＲを兼ねて開かれたのが、淡路花博「ジャパンフローラ2000」なのである。

※淡路夢舞台URL：http://www.yumebutai.co.jp/
兵庫県の淡路夢舞台URL：http://www.hyogo-iic.ne.jp/~yumecorp/yumebutai/

第一部へ　　次ページへ

３．訪問実態レポート

(1)導入アプローチ

訪問当日は、時折小雨が混じる空模様で、明石海峡大橋から見えるはずの瀬戸内海の景色は霞がかかり、残念ながらよく見えない。この大橋を５分ほどで抜けたすぐの「淡路I.C.」で降りる。淡路花博会場を案内する独立看板は、インターチェンジの案内標識の中や道路沿いに、これでもかといわんばかりに配置されており、迷うことはない。料金所で通行料金を払い（2,600円は高い）、国道28号へ。すると最初の交差点から、警備員が会場方向へ誘導してくれる。そこから５分ほど南へ走って、会場駐車場入口に到着し、そこから再び警備員の誘導で駐車場内へ。

開場は９：30であるが、時計を見ると９：15。まだ開場時刻前だが、それでもすでに半分ほどのスペースが多数の観光バスで埋まっている。約５m間隔に立っている警備員（雇用対策？）の誘導に従い、無事駐車する。

会場時間前でもすでにオープンしている入場券売場でチケットを購入し、正面玄関に向かう。その間も駐車場には観光バスが続々と到着している。降りてくるほとんどはお年寄りだ。まだ開門していない正面ゲートに着くと、東京の浅草や巣鴨でも、一度にこれだけの数を見られることがないくらいのお年寄りの団体（ざっと２～3,000人）が、今か今かと鬼気迫る迫力で列を作っている。平日ということもあるのだろうが、ファミリー客、若者は、ほんの少数。場違いを感じる雰囲気（筆者は一応30代）の中、しばらくすると開門のアナウンスが流れ、並んだ順番に入場する。

淡路花博は、大きく３つのゾーンに分かれているが、入ってすぐが“にぎわいゾーン”（約12ha：東京ドーム約2.5個分）。展示パビリオンやレストラン、ショッピングモールを集中的に配置し、人々が交流するにぎわいのある街で、海沿いにはアミューズメントパークもある。

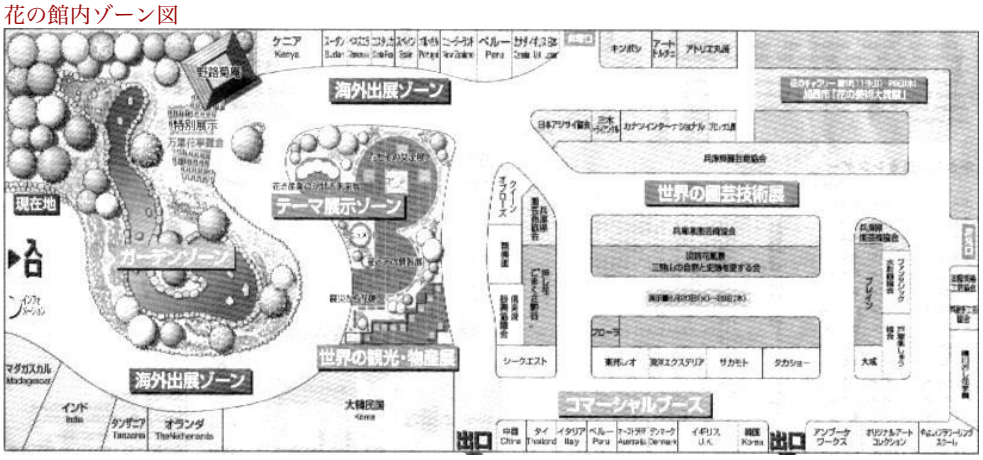
（写真１）メインゲートからの外観

メインゲートをくぐると、目の前に２つの大きなパビリオンとアーケードがそびえ立つ。これは、建築家・安藤忠雄氏のデザインで、空に浮かぶ雲をモチーフに間伐材を活用したテント構造のモニュメントである。隣接する「緑と都市（まち）の館」から見学…と思ったら100m以上の長蛇の列（しかも全てお年寄り）。どうやら、ここが団体の順路に入っているらしい。そこで最後にチェックすることにして、左側に位置する「花の館」へ向かう。

(2)花の館（テーマ：人と花のコミュニケーション）

ゾーンマップ

花の館内ゾーン図



（写真２）花の館外観

ここは、「花とその交流展」「花とその情報展」「花卉産業の現状と未来展」のテーマ展示と、「国際フラワーショー」をはじめとする趣向を凝らしたの花の展示会（開催期間中計18回）を開催している（写真２）。

アプローチは、小川や小山に樹木、草花が植え込まれ、小規模だが日本風庭園を造り込んだガーデンゾーン。ただし、室内での造作は迫力に欠ける。ここで、年輩女性のグループが、お決まりの庭園を背景に交代で記念写真を撮り、しかもその順番待ちでの列で、なかなか庭園の詳細が見えない。そこで、人混みを分けて先へ進むと、ちょうど庭園の反対側の位置に、世界各国の文化・風土の特徴を庭や植物の紹介で表現した、小間で切ったブース（間口約３～５ｍ）がある。東京ビッグサイトの見本市のにぎわいが想起できる。ただし展示レベルはバラバラで、オランダはチューリップをきれいにならべてあり感動的だが、韓国は、大きなシリンダーにアルコール漬けの高麗人参が展示されているだけで、正直言って好感は持てなかった。

パビリオンの半分は、「短期出展ゾーン」として花の展示会を開催している（写真３）。しかし展示方法は、テーブルに白いクロスをかけ、作品に出展者名を記して置くだけのアマチュアの発表会レベルである。それでも、作品は工夫を凝らした寄せ植えや盆栽で、１つ１つ見ると感心するが、あまりの数の多さに、よほど興味がない限り飽きてしまう。ここは展示方法に何らかの工夫が望まれる。

これで「花の館」を後にするが、いぜん「緑と都市の館」の混雑は続いており、レストラン＆ショッピングモールは、最後に回ろうと思い、次のフローラゾーンへ進む。

（写真３）短期出展ゾーン

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

(3)国際庭園

ゾーンマップ

パビリオンから先は、“フローラゾーン”（約29ha：東京ドーム約６個分）。花と緑と水と人が交流する施設が点在する。ここから、会場内遊覧トラム「ユメハッチ号」（日産のプロパンガス燃料自動車）がゾーン内の約２㎞の周遊コースを回っている（写真４）。途中の７停留所で乗降車が可能で、料金は１乗車につき１人300円と少々高め。それでも、子供はもちろん、お年寄りも結構喜んで乗っており、メインゲートに一番近い停留所では、行列ができていた。しかし、これに乗ると停留所間にある施設や造作をゆっくり見ることができないので、歩くことにする。

（写真４）ユメハッチ号。子供受けを狙ったデザイン

最初の「国際庭園」には、世界各国をはじめ、各都道府県が出展参加し、伝統的な造園技術による特色ある庭園が整備され、ちょっとした旅行気分が味わえるという。

（写真５）展望デッキから国際庭園を望む

「海外展示ゾーン」は１ブース約10m×25mの規模。たしかに、ヨーロッパの庭園は噴水や彫刻、中南米はサボテンを使うなど門、植物、石、あずま屋、噴水、彫刻などにその国の特徴がよく表現されている（写真５）。あずま屋の中などで楽しそうに写真を撮っているお年寄りも少なくない。これに比べると、先ほどの「花の館」で見た「国際フラワーショー」など全く参考にならない。

また、ここには国際庭園が一望できる展望デッキを設け、デッキの下は、休憩、喫煙所としてイスを設けるなど、動線にも工夫がある（写真６）。ただし、５月に行った犬山市「リトルワールド」（注２）の縮小版という雰囲気で、ちゃちさは拭えない。

（写真６）国際庭園の展望デッキ

「国内庭園ゾーン」は、兵庫県をはじめ各都道府県が、約10m×10mのブースに出展。各地の代表的な庭園様式や風景、史跡などを再現している。しかし京都（古都をイメージ）や栃木（日光をイメージ）はわかるが、近代的な鉄筋の門に細い鎖をのれん状に下げ、電光掲示板で県をアピールするなど、前衛芸術的理解を求める庭園もある（写真７）。それぞれ小さい説明板

（写真７）前衛芸術的な国内庭園

（約30cm×50cm）が設置され、その内容を読むと「あっ、なるほど」と思うものもあるのだが、これだけ数があると、どこまで読んでもらえるだろうか。現実は、知識活動より観光である。年輩の観光客が、自分の出身県の前で楽しそうに記念写真を撮っている姿が多く見かけられた。

注２：「リトルワールド」
　愛知県犬山市にある、アミューズメントテーマパーク。世界各国の生活を、それぞれ代表的な庭、建物、生活用品の展示から体験できる。各ブースの規模は、庭、建物１軒分で、隣のブースは見えないように壁や距離をとって、そのブースの雰囲気を大事にする工夫が見られる。

(4)生産技術展示園（テーマ：園芸がひらく生活と産業）

（写真８）生産技術展示園外観

　ここは、園芸の最先端技術を展示・紹介するエリアである。屋外花壇にはトマト、なす、ピーマンなど園芸野菜が並び、家庭菜園を趣味とする人には興味深いだろう。実際、野菜類を１つ１つ確認しながら見ている年輩のご夫婦がいた。スーパー、八百屋以外で野菜を見る機会が少ない筆者としても、思わず足を止め、「この葉はカブ？大根？」などと知識活動を活性化させていると、いつの間にか温室タイプのパビリオンの入口に到着する（写真８）。

　この入口の前には、生ゴミを肥料に変える機械（約５m×３m）が２台設置されている。淡路花博では、会場の生ゴミは全てこの機械により肥料に変えて、会場内で利用するというリサイクルを実施している。閉会後も、淡路夢舞台のリサイクル機能の１つとして、恒常的に稼働させる予定だという。

　パビリオン内の、最初は切り花の栽培を展示。整然と並んで咲く様は、栽培というより、まさに生産という感じである。その奥には、プチトマトが手を伸ばすと届く位の高さで天井一面に実っており、壮観である。最先端の栽培技術を駆使し、３カ月で半径約５mにまで伸長し、実りを迎えている。思わず手にとって食べたくなるが、さすがに「今後いらっしゃる人にも見せるために、食べないでください」と数カ所看板に但し書きがある。ところが、「おっ、これうまいで」と男性年輩者が早速口に入れている。それを見て、続々とおばちゃんが「ほんまやー」とバクバク食べ始めた。すかさず、手入れをしていた係員が、「食べないでください！」と注意すると、謝りもせず意味不明なニヤニヤ笑いを浮かべながら、退散していった。
　このようにエチケットのない人が増えると、せっかく手で触れる展示に工夫しても、結局はガラスで囲われるなど、興ざめするような防御策を採らざるを得なくなる。来場者のモラルが問われるところである。

　温室を出ると、屋外の果物園で、ブドウ、ナシなどが植えられている。取材当日は果実のほとんどが熟していなかったが、実りの秋には、先ほどのプチトマトのようにならなければよいがと心配してしまった。

　果実園の先は、ハーブ喫茶、軽食テイクアウト、博覧会グッズの店舗が３店並んでいる。とくに珍しいものは売っていないが、ハーブティーの葉、ハーブ入りパンなどに人気が集まっていた。

（写真９）ミニＦＭ局のスタジオ

（写真10）グリーンショップ

　「生産技術展示園」を下りてくると、「グリーンショップ」とファーストフード店が数店建ち並ぶ「ビアガーデン」、「ミニＦＭ局」がある。
　「ミニＦＭ局」のスタジオは、多角形で高床式の変わった建物で、ガラス張りのため、放送中の様子が見える（写真９）。スタジオ付近の一帯に設置したスピーカーで放送を流してＢＧＭとなっていた。来場客のほとんどはラジオ持参で来ているはずもなく、本来の放送は一体誰が聴いているのか疑問に思った。

「グリーンショップ」では、会場内にある草花や、その苗、種などが販売されている（写真10）。最近のガーデニングブームもあって、大混雑である。しかし、買っている人は少ない。よく考えると、この場所は会場のほぼ真ん中。買ったものを持ったままこの広い会場を歩き回るのは、大変である。その辺が購買意欲に水を差しているのだろう。

「ビアガーデン」で地ビールでも飲みたかったが、まだまだ見るところがいっぱいあるためガマンし、隣の「花と緑のライフスタイル館」へ。

(5)花と緑のライフスタイル館（テーマ：花と暮らしと住まい）

パビリオンの「バーチャルランド」では、パソコン上で「ドラえもん」と一緒に「たね」から花を育てるシミュレーション「バーチャルガーデン」を体験できる。さっそく入ってみると、さすがにお年寄りは見かけられず、背広姿の中年男性２人（たぶん造園業界者）と、子供連れファミリー、筆者の３組だけ。

（写真11）まずはパソコンに座る

まずはパソコンに座り、デジカメで各自顔を撮影（写真11）。そして、パソコンの中の育てたい花の種を選択し、植木鉢に植える。そこから栽培に関するクイズが３問出題され、正解する度に花が育っていく。そして最後に、デジカメで撮った顔を中央に写した花が、前方の大型モニターに咲くというストーリーである。すべて、コンパニオンとパソコンの中で「ドラえもん」が案内してくれるため、子供でも簡単に操作できる。できあがりの花は、おじさん層が多いこともあって、異様なものであった（写真12）。

（写真12）わかりづらいが、花の中はおやじ顔がずらりと並んで不気味

パビリオンを出ると、屋外展示の「グリーンラボ」。ここは、「緑の家」「光の家」「瓦の家」３つの建物を中心に、リビング、サニタリー、土間キッチンなど、戸外空間と一体化した新しい住まい方の実物展示している。

「緑の家」は、リビングとテラスを一体化させたパーティスペースや、露天風呂のような眺めの良いバスルームなど、開放感を重視したアウトドア感覚の住まいの提案。

「光の家」は、全てガラスでつくり、サンルームを住居の一部に取り入れることで、生活空間と自然が融合し、暮らしに潤いを与えることを提案。

また「瓦の家」は、深いひさし、土間、板の間、いろりなど、懐かしい空間を造っている。それぞれ、まわりの庭は凝っているが、10坪ほどの建物で、住宅メーカーの展示会場との違いがわからず、そのまま素通り。お客の数もまばらであった。

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

(6)テラスガーデン

ゾーンマップ

この“フローラゾーン”は、花博終了後、約20ha（東京ドームの約４個分）が平成13年度中に「国営明石海峡公園淡路地区」として再オープンする。その国営公園内に残すことが予定されている「テラスガーデン」は、起伏に富んだ空間に、“空のテラス”（写真13）“月のテラス”（写真14）など13のテーマ様式による庭園を配している。

（写真13）空のテラス

（写真14）「月のテラス」から瀬戸内海を望む

「テラスガーデン」に使用されている草花、木材、石材は世界各地から集められたもので、例えば「月のテラス」のベンチには、ジンバブエ産の黒御影石のほか、イタリア、インドネシア産の石材等が使用されている。このほか西アフリカや北アメリカから寄せられた木材も随所に使われ、庭園ファンには興味深い場所であろう。もちろん特別興味がない人でも、それぞれの庭園の美しさに感動できる。実際、異国にいると錯覚しそうなほどであった。

また、テラスガーデン内を流れる灘川では、一度流れ出た水を河口付近でキャッチして循環させるなど、貴重な水資源を有効に活用するため、雨水の貯留、排水の浄化、流水の循環など、さまざまな工夫がされている。

このエリアは、“花と緑と水と人との交流”がテーマとあるだけに、自由に出入りできる芝生をはじめ、各テーマの庭園内に多数のベンチが用意されている。

ここで、観光バスで訪れた団体らしきグループの多くが、バスを降りるときに渡されたであろうお揃いの弁当を広げ、思い思いの場所で食べている。そのため、お茶の空き缶がベンチに置き去りにされたり（筆者が中身を捨て、ゴミ箱へ）、弁当箱でゴミ箱があふれかえっていたり（４種類に分別されているがどこにもお構いなし）で、美観を損ねている。これでは駐車場の警備員の充実より、清掃係の人数を増やすのが先決では…と思ってしまった。

（写真15）ガーデニング教室のテント

西ゲート前の“展望広場”は、「テラスガーデン」の中で一番高台にあって会場を一望でき、軽い食事もとれる。その飲食コーナーの横のテントでは、「ガーデニング教室」が行われ（写真15）、参加費1,000円で寄せ植えを教えてくれる。所要時間は約30分、もちろん作

品は持ち帰りも可能で、約10名の女性が参加していた。チラシを配っていた係員に話を聞くと、オープン当初は参加費2,000円で始めたが、なかなか人数が集まらず、思い切って1,000円にしたところ好評で、参加者の口コミからか、日を重ねるごとに人数が増えてきたという。

「ガーデニング教室」横の「市民ガーデン」では、ガーデニングコンテストが行われていた。個人またはグループで約３m四方の区画に好みの植物や小物を使って作品を創り、題を付けて出品している。「ガーデニング教室」を開催しているテントに選考用紙が置いてあり、来場者は自由に投票できる。

当日は５組ぐらいの老夫婦が、うんちくを語りながら真剣に選考していた。30ほどの出展作品には、小学校でクラス全員が造った微笑ましい作品や、個人が人形や石を使って前衛芸術を標榜した作品など、それなりに目を楽しませてくれて、ほっとする雰囲気である。

(7)海のテラス、淡路・虹の花壇、花の中海

「テラスガーデン」の海側は、瀬戸内海が一望できる「海のテラス」。ここは「淡路交流の翼港」から出航するクルージング「日本丸」も見え、なかなかの絶景である（写真16）。

（写真16）「海のテラス」から日本丸が見える

このテラスの１階は、「国営明石海峡公園ＰＲコーナー」となっており、ちょっとした休憩所も兼ねている。正午も過ぎ、気温も上がり、少し疲れたこともあり、休憩を兼ねてＰＲコーナーへ入ってみた。中は、「国営明石海峡公園」の計画・効果などを事業概要パネルやジオラマなどを使い、わかりやすく説明してある。

また、全問正解すると賞品がもらえるクイズを実施している。箱の中に手を入れ手触りだけで樹木の種類を当てるものや、鳴き声で虫の種類を当てるもの、飴をなめてその材料となった果実を当てるものなど、出題はこの公園内に生息する植物、鳥、昆虫などを題材としている。さっそく挑戦してみるが、２問間違いで賞品は手にできなかった。その間お客は２人だけで、１人はバスガイド。自身の勉強を兼ねての挑戦であった。

ＰＲコーナーの前はファーストフード店が５～６店建ち並び、オープンエアの休憩所となっている。しかし、そこから右一面に「しおさい花園」の花と草原、目の前は青い海、左はアミューズメントパークと絶景だが、会場からは見えない位置にあり、利用者はまばら。すばらしい景色を演出に時間を楽しみたいカップルには穴場スポットかも知れない。

「海のテラス」から南側は、「淡路・虹の花壇」（写真17）。色とりどりに咲く約30万本の花のグラデーションが虹のように広がる大花壇であるという。虹と言うからには規模と色彩に期待して行ってみたが、花壇は起伏が付けられ、近くで見てもその一部しか見えない。実は、反対側の高台から見るのが一番美しいということがわかり、ガッカリして次の「花の中海」へ。

（写真17）遠景から見た「淡路・虹の花壇」

「花の中海」は、池の中島に花が咲き、ボートにも乗れる憩いの場所。親子連れが２組スワンボートに乗って、はしゃいでいる。しかし、ボートが乗れる範囲が狭く、すぐに岸に近づいてしまう。お疲れのパパには救いだが、子供には物足りなさそうであった。

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

(8)淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」

ゾーンマップ

館内マップ

“フローラゾーン”の先は、３つ目のゾーン“夢舞台ゾーン”（約28ha：東京ドームの約６個分）。国際的な人と文化の交流ステージとして整備した淡路夢舞台は、すべて建築家・安藤忠雄氏の企画・設計。斜面地の緑を背景に花の夢、水の夢、海の夢、山の夢、さらには、ここに集う人々の夢が織りなす壮大なランドスケープで、同博覧会の目玉といわれている。

（写真18）奇跡の星の植物館外観

まずは、淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」へ。ここは、“宇宙の偶然が生み出した奇跡の星「地球」の自然を見つめ、植物の美しさや不思議を知り、地球に生きることのすばらしさ、この奇跡を守ることの大切さに気づいてもらう”のがコンセプトである。

（写真19）通路から館内が一望できる

建物の外壁は全てガラス張りで（写真18）、中は非常に明るい。エスカレーターで３階まで上がり（車いす、ベビーカー用にエレベーターも設置）、上から順路に従い、下りながら見ていく動線である。中は吹き

抜け構造で、通路からも全体が一望できる（写真19）。しかも白を基調とした造り込みに、植物の緑とそれぞれの花の色が見事に調和し、ヨーロッパの城の庭園を彷彿させる。

最初の展示室「プランツギャラリー」は、樹齢300年を超えるアロエや巨大なサボテンなどの多肉植物を池の中で島のように展示している。植物が巨大で、見応えがある。よく見ると形もねじれていたり、重なり合ったりと興味深い。この他にも通路の横にも様々な多肉植物が植えてあるが、色が緑だけで派手さがないためか、ほとんどの人が素通り状態。もう少しここの狙いをアピールする工夫があればと思いながら、次へ移動するため、順路に従い階段を下りようとした。

しかし、車椅子の一行が、階段が下りられずに立ち往生している。介助の人が「あ、スロープはあっち」とスロープをやっと見つけ、人の流れに逆らいながら移動し、無事スロープへ。よく見ると、スロープは順路と関係なく一番端にあり、案内板もないため、非常に不親切。高齢者の来場が多い状況からも、ここは、係員を要所に配置し、スムーズに移動できるようにすべきだと強く言いたい。

その他の展示ゾーンは、南国の葉の色が赤い植物を展示した「トロピカルガーデン」、水を使い、静けさや涼しさを演出した日本の庭「花と緑のある暮らし」、ハーブを集めた「癒しの庭」、花と人の交流をテーマとした「フラワーショースペース」、暗所に生息するシダ類を集めた「シダルーム」など。どの展示もそれなりに美しかったが、その中でも圧巻だったのが「フラワーショースペース」。取材当日は“ウェディングフラワーショー”と題し、50種以上もの白い花ばかりを収集・展示していた。例によって女性客はその花をバックに写真を撮りまくる光景がつきまとう。

(9)その他の夢舞台ゾーン

“夢舞台ゾーン”における淡路花博の有料エリアは、「奇跡の星の植物館(夢舞台温室)」と花のイベントショーを行う「野外劇場」（写真20）のみ。その他、「百段苑」と「プロムナードガーデン」の花や緑の展示、「国際会議場」、「ホテル」、千本の「ミレニアム噴水」、百万個の「貝の浜」などは無料エリアとなっている。無料エリアへはゲートで手続きをすれば再び有料エリアへ入ることができるのだが、時間的な制約から見学はかなわなかった。ここではパンフレットからの紹介に止める。

（写真20）野外劇場

●「百段苑」「プロムナードガーデン」

階段状に、１区画4.5m四方の百区画の花壇とカスケード（小滝）構成される百段苑は、国際的な視野に立った新しいタイプの花壇を作るため、国際的なデザインコンペを行い、その最優秀作品を基に展示している。“夢紀行－世界のキク科植物との出会い”をテーマに23,000種を超えると言われるキク科の植物を世界から集めて、原産地ごとに４つのブロックに分けて展示している。

直線380mの散歩道「プロムナードガーデン」は、百段苑とともに実施した国際コンペの最優秀作品を基に、展望、憩い、移動の要素を盛り込んだ展開で、博覧会のにぎわいを演出している。遠くに大阪湾の光る波、真下に会場のお花畑を展望する"ビューポイント"となっている。

●「淡路夢舞台国際会議場」

地上４階、地下１階建て。「新しい会議文化の創造」を基本テーマとした淡路夢舞台国際会議場は、都市型コンベンションセンターとは一線を画した中規模の国際会議場として、豊かな自然環境の中、最新鋭の設備と、経験豊かな会議場スタッフによる万全のサポート体制により、ハイグレードな会議環境を提供する。

●「ウェスティンホテル淡路」
　リゾート＆コンファレンスをコンセプトとする同ホテルは、名門「ウェスティンホテル」により、くつろぎとやすらぎの空間を演出するハイグレードなホテル。地上10階、地下２階建て。

●展望テラスレストラン＆ショップ
　淡路の自然と新鮮な海の幸・山の幸を生かした食事ができるファイン・レストラン。気軽に利用できるフレンドリー・レストラン。緑の公園と海が全面に広がる明るい空間のガーデンカフェ。そして、淡路夢舞台のオリジナルグッズやおみやげなどを提供するスーベニア＆コンビニエンスショップから構成されている。地上３階建て、７店舗。

●「貝の浜」「千の噴水」
　「貝の浜」に敷き詰められた貝殻は、北海道の水産物加工場で廃棄される予定だったもの。集められた500万枚の貝殻から、同じような大きさ・形の貝殻100万枚を手で選別。割れないように、裏にモルタルを詰めて補強しながら、一枚一枚手作業で張り付けられている。大変な時間と手間をかけ作られた、美しい人工の浜。貝の浜には、あちこちに合計1000本もの噴水が造られている「千の噴水」がある。ダイナミックに、静かに、場所によってさまざまな勢いで噴き出す水が生み出すアトラクションで、夢舞台の水面には、小さな落差や、落差7メートルにもなる滝などもあり、噴水と合わせ、変化に富んだ水景を形作っている。

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

(10)「緑と都市（まち）の館」（テーマ：みどりの都市文化）

ゾーンマップ

（写真21）緑と都市の館外観

混雑していた“にぎわいゾーン”の「緑と都市（まち）の館」（写真21）もそろそろ空き始めたかなと思い、戻ってみると、いぜん約100名の行列である。ところが、横にある入口から入っていく人もいる。なんで？？？と思い、入口近くの簡単な案内板（約１m×２m）をみると、左側の入口（行列側）がじっくり見学コース（所要時間約45分）で、右側がショートコース（所要時間約15分）の入口となっている。

係員に違いを聞いてみると、所要時間の説明とショートコースはジャングルを体感できるエリアを通らないとのこと。また、このパビリオンの目玉、世界最大の花「ラフレシア」はどっちの入口からでも見られるが、じっくりコースは入口までが現在約20分待ちということから、時間もないので、迷わずショートコース入口へ。

入ってすぐの所で、「世界最大の花フラレシアはここです」と係員が案内している。パンフレットには大きいものは直径1.5mにもなると書いてある。どれどれと覗くと直径約50㎝の半球ガラスの水中に入った巨大キノコのようなものがある。色も変色したのか茶色で「これが？」というくらい感動なし。出鼻をくじかれ、先へ進む。

次のエリアは「ジャングルスタディ」。大木が横たわり、壁にはジャングルっぽい絵を描いて雰囲気を盛り上げている。しかし、パネルによるジャングルの生物紹介、昆虫の視点から見た映像を流すモニターなどは、コンテンツが細かすぎるのと、スケールが小さいことからちゃんと見る気がおきない。軽く流し、ジャングルの音響がリアルに聴けるというコーナーへ。

ここは、天井から直径１mほどの半球カプセルが８個ほど下がり、その下に行くと、「ジャングルの朝」、「ジャングルの夜」などのテーマで、虫、鳥、獣の鳴き声が聞こえる。しかし、それぞれの違いは、朝・昼は鳥の声が多く、夕・夜は虫、獣の声が多い位の違いで、実際に耳を澄ましてみてもそれほど明確に変化がわからない。来場者の様子を見ていると、ほとんどの人が２つぐらいまで聞き、「ふーん」とコーナーから離れてしまう。演出や内容に、もう少し興味をそそる工夫が欲しいところである。

先へ進むと、両側の壁に羽が生えた女性など、昆虫と人間を合体させた絵や彫刻

が展示してある。意味が分からないので、パンフレットの解説を参照してみると、次のエリアはフランスの昆虫学者ファーブルをテーマとした「緑の宇宙―ファーブルの世界―」となっている。なぜ突然ファーブルなのか疑問に思っていると、どうやら神戸市がファーブルの故郷アヴェロン県と姉妹都市ということらしい。昆虫と人間の合体絵画や彫刻は、その予告のつもりらしい。

ファーブルの書斎を再現したコーナーでは、床・壁に直径約20㎝のガラスを貼った穴がたくさんあり、その中に本物の昆虫の標本が入っている。コーナーに入ろうとした客（特に女性）はみな「うわあ、気持ち悪い」といって入口で退散していく。筆者がこのコーナーに入ってから、奥まで入って到達した人は２組だけと不評のようであった。このコーナーでは、自然と融和と共生がテーマの映像も上映しているが、上映時間が約12分もあり、だれも見ていなかった。しかし、夏休みには昆虫が大好きな子供が増え、好評を得たものと確信したい。

次のエリアは「花と緑のフォトギャラリー」。ここは「富士フイルムフォトコンテスト」の入賞作品や著名人（当日は橋本龍太郎氏）の花と緑をテーマとした作品を展示。またなぜか「世界遺産写真展」も開催し、写真が好きな人には好評を得ているようであった。
このエリア以降は、このパビリオンのテーマでもある“みどりの都市文化”に沿ったエリアが続くが、ビデオ上映、パネル・模型展示がほとんどなので、以下簡単に紹介する。

●**「花と緑の街づくりビデオギャラリー」**
世界各国の特色ある緑の街づくりなどを４ブースでビデオ紹介。また、大画面ブースでは日本国内の北から南まで９地区で、緑や花作りに関わる人を取材したビデオを上映している。

●**「ひと　まち　みどり」**（上映時間約10分）
“人とみどりが響き合うまちづくり”をテーマに、映像とジオラマを使い、安全で緑豊かな国土や生活環境について考え、建設省近畿建設局が取り組んでいる自然を守り生かす技術も紹介している。

●**「緑を再生し、緑と共生する取り組み」**
淡路花博における自然斜面の緑を生かした造成技術や、被災地での緑化事業など、各地の環境保全への取り組みと、人と緑が共生する都市計画の新しい試みを模型やパネルで紹介している。

●**「緑の芸術」**（上映時間約19分）
世界の名庭園めぐりをハイビジョンシアターで上映。各国の庭園文化や都市を造りための技術、人と緑、都市と緑の関わりを紹介している。

●**「ヨーロッパ夢紀行」**（上映時間約12分）
長い年月をかけて築かれたヨーロッパ各地の自然庭園や美しい町並みを、３Ｄハイビジョンシアターで上映。美しい自然や都市の風景に、ＣＧによる小説の名場面を織りまぜて紹介している。

上記の各コーナーでは、それぞれ席の半分ほどしか埋まっていなかったことを付け加えておく。

(11)「アジアショーケース」（テーマ：アジアン文化とのコミュニケーション）

グルメエリアマップ

（写真22）アジアショーケース入り口

メインゲートから入って右に位置する、テントづくりのアーケードが「アジアショーケース」（写真22）。ここは、博覧会の楽しみの一つである“食べる、買う、遊ぶ”を要素として、アジアの界隈性が漂う大屋台村とバザールから構成されている。

フローラゾーン方面から入ると、まず総合食堂「ワールドレストラン」およびアジア各国の料理屋台が並ぶ。屋台の向かい側の「ふれあいステージ」では、イベントとして飛び入り歓迎の「阿波踊り」が行われていて、観客席に座れない客であふれかえっている。

今だとレストランは空いているだろうとさっそく中へ。造り込みはパビリオンと同じテント風の造りで、屋台の前にテーブルを並べ、空席は数えるほどであったため、駆け足で、順にどんなメニューがあるのか見て回る。

まず目に付くのが、マレーシア料理の「ロッティチャナイ」（薄く焼いた生地に、ピザまたはカレーソースを付けて食べる）を作っている屋台。プロ野球・読売巨人軍のガルベス投手似のシェフによる、全身を使いピザ生地のように薄く生地を伸ばすパフォーマンスに、皆立ち止まって行列を作っている。

行列ができるぐらいうまいのでは、という想像で第一候補に挙げながら、他の屋台もチェック。メキシコ、エジプト、インド、スリランカ、韓国、中国、タイ、ミャンマー…。あるわあるわ約10カ国（中には年輩者用なのか「広島焼き」「明石焼き」「うどん・そば」など日本のメニューも）。辛い物好きなので、目移りしてしまったが、第一候補の「ロッティチャナイ」（800円）に決定し、行列に並んで購入。

しかし実際に出てきたものはというと、３つに分かれたプレート紙皿に直径20cmほどの薄い生地と、ソースが２種類。味は…「うーんこんなものか」という感じで、ほとんど辛くない。これで800円はちょっと高いのでは。この辛さがスタンダードなら、タイの屋台にあった「トムヤムラーメン」を選ぶべきだったかな…と少し後悔した。

お土産エリアマップ

食事を終え、お土産でも買おうと隣の物販アーケードへ。ここは、中央の通路を挟み、両側にアジアを中心とした各国の特産品や民芸品、博覧会グッズや兵庫・淡路の名産品を販売している。通路の要所に雰囲気を壊さないように造り込みと同じ間伐材で囲んだ大型クーラーが設置され、テント内はそれほど暑くない。

順番に見ていくと、各店とも狭い店内の壁、天井全てを駆使して商品を陳列している。店員もその国の人がカタコトの日本語で呼び込みをやっている。多分にアジアの屋台市場を彷彿させる雰囲気である。しかし、アクセサリー、置物、民族衣装、お菓子、缶詰など同じような品揃えで、どの店も代わり映えはしない。まあ、「リトルワールド」のショップとほとんど同じ内容で、筆者には新鮮味がなかったためかもしれない。

何か、この博覧会の記念になるものを…と思い、見て回るうちによく考えると、ここは、淡路花博。なぜアジアの特産品、民芸品なのか。やはり観葉植物であろうと思い直して必死で探すが、結局見つからず、何も買わないままショップを後にした。

こうして会場を後に、駐車場に向かう途中、駐車場のメインゲートに最も近い場所に「グリーンショップ」を発見する。持ち歩きに植物はそれなりに重さがあることに配慮した立地である。ここなら…と立ち寄る。しかし、会場内にあったグリーンショップの約１／３の規模で、品揃えも少ない。会場内では食虫植物でも買おうかなと思っていたが、この「グリーンショップ」には置いてなく、ついにお土産はあきらめてしまった。

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

４．まとめ

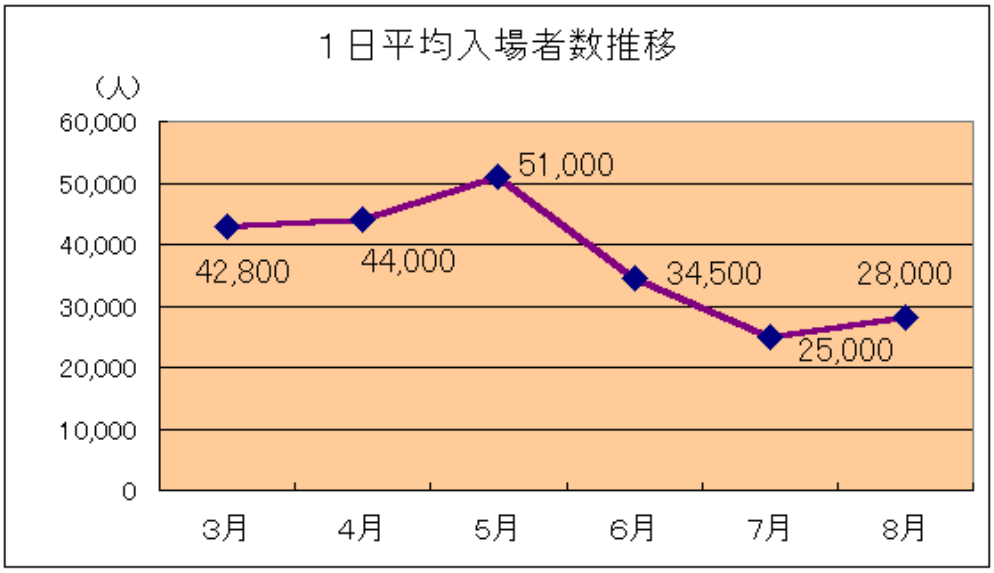
まず、来場客層に高齢者が占める割合が非常に大きいことに驚いた。その背景として、経済的・時間的余裕のあるシルバー層の増加や、国内旅行は全国各地一通り経験した人にとって、期間限定の博覧会は、二度と体験できない新しい観光としてインパクトがあるためであろう。さらにブームとなっているガーデニングの見識を深めることができ、一般から園芸好きまで、広くアピールするわけだ。
またパッケージツアーとしても、明石、神戸や淡路島の温泉、鳴門海峡、四国などを周遊コースとして盛り込むことで喜ばれそうである。
しかし、広大な会場を、時間優先のツアーで回るとなると、入場する前にバスガイドや添乗員から、必見ポイントを聞き、そこだけに集中するため、人気の場所は人でごった返すことになる。本来であれば、花博だけを２日間ほどかけてゆっくり見て回るツアーが望ましいのだが…。

個人のホームページで感想を語っている「淡路花博」訪問記を見ると、フリーパスポートが好評のようである。近隣在住の人は、時間が空いた平日の夕方に何回も訪ねているようだ。確かに、ひとつのテーマでも郊外の公園など比較にならない規模のものもあり、そこで造作の素材やデザイン、草花をゆっくりと楽しむには、時間をかけて少しずつ見ていくのが望ましい。さらに、今"癒し系"を求める若者も、デートスポットとして好評を得ていると想像できる。一方、これまで行われてきた博覧会のように、ライド式のアトラクションなどアミューズメント性は希薄なため、子供には飽きが早いかも知れない。

この博覧会が終了しても、会場のほとんどがそのまま利用されることになっており、メンテナンスさえ行き届けば、横浜の「山下公園」「港の見える丘公園」のように地元・近隣住民の憩いの場として、または観光スポット（目玉がないが）として、活用されるのであろう。そこで心配されるのは「国際会議場」の利用があるかどうかである。例によってコンベンションよりも、コンサートや見本市会場としての利用が多くなるのだろうが…。

この夏、猛暑の影響もあり、夏休み期間中、地方のテーマパークは入場者数、売上が伸び悩んだという。「淡路花博」も屋外イベントのため、開催当初から盛夏期の落ち込みは予想していたという説明のとおり、梅雨が明けて７，８月の一日の平均入場者数は、ピーク時の５月の約半分にまで落ち込んでいる（グラフ１）。

（グラフ１）「淡路花博」月別１日平均来場者数推移



一般的に恒久施設のテーマパークにとって、多客時に相当する夏期の伸び悩みは死活問題である。「淡路花博」の場合、植物が最盛期を迎える春～秋の期間限定で、さらに屋外中心の“ガーデニング”とアピールがはっきりとしており、そもそも暑さや雨による落ち込みは予想できたことから、事務局はそれほど気にしていないようだ。
ちなみに、恒久施設と期間限定施設ということで単純には比較できないが、「ハウステンボス」「スペースワールド」の夏休み期間中の１日平均入場者数は約12,000～14,000人である。猛暑の中、屋外展示が中心とわかって訪れた来場者が１日平均25,000人という「淡路花博」は大健闘しているという見方もできるのではないか。

実は、筆者は博覧会なるものは「愛知デザイン博」以来、２回目の体験であった。「愛知デザイン博」では、各パビリオンのアトラクションや最新デザイン画、隠し絵など、体感・視覚的に驚き、おもしろさに酔った。しか

し、どこへ行っても人混みで、一方ではもう博覧会なんかこりごり…と思ったのも事実である。
　ところが、この「淡路花博」では、体感・視覚に“癒し”や“心地よさ”のような静的・浮動的な雰囲気で、活動的な「愛知デザイン博」と正対する状況にも関わらず、“驚き”“おもしろさ”を認識できた。これは、年齢的な変化のせいかもしれないが、都会生活が長く、自然とふれあい、広大なオープン空間の中に身をゆだねることが少ない典型的な大都会生活者の筆者にとっては、思いのほかの充足感は、現在の価値観や感性と合致できたからであろう。そういう意味で、また訪ねてみたいと思える博覧会であった。
　この博覧会が終了しても、新たに「国営明石海峡公園」として再出発するこの空間を、再訪問してみたいと思う。

　８月20日付けの日経新聞に、「環境」をテーマとして開催されているドイツの「ハノーバー万博」が予想を超える不人気とする記事があった。報道された内容では、１日の予想入場者数を20〜30万人に設定していたが、連日その半分から１／３程度。総入場者見込みも当初の4,000万人から1,400万人に下方修正している。このため、協賛企業に頼れない小国やNGO出展者の多くが破産寸前だという。
　展示内容も、環境問題を堅苦しくとらえ、先進国では娯楽性に欠ける内容、途上国は観光物産展になってしまっているらしい。
　不人気の理由の１つとして、ドイツの新聞編集者は、「ドイツ人は環境に対する意識は高く、その深刻さも理解しているだけに、環境を娯楽のイベントとしてとらえにくいのでは」という見解。来場者のインタビューでも「もっとテーマパークのような形で体験できるようにして欲しかった」という声も聞かれたとか。

　以上から見ると、外国からの来場者は、これまでの万博のように、イベント性や最新技術の疑似体験などのアトラクションを求めて来場し、娯楽性の無さに帰国後不評を伝える。一方の地元ドイツ人は、人が集まれば排気ガス、ゴミなど環境を壊すことになるため、行くこと自体をやめてしまっているのではないか。
　そもそも、人が集まれば環境を破壊する。環境とは娯楽と正反対であることは明確である。そこをあえてテーマとして、長い時間をかけて企画し、実施しているのであれば、集客や収支だけで成功・失敗を判断されない基準と仕組みをつくらないと、主催者側はたまったものではない。

　すでに、博覧会は万人受けするようなイベント性を全面に出し、最新技術のアトラクションによる集客の時代は終わっている。思い切ってテーマに共感できるターゲットを絞り、そのターゲットが満足し、楽しめることを優先した企画とすべきである。さらに開催期間が終了した跡地も地域のために貢献できる活用方法が博覧会企画と同時進行で行われなければ、特定の存在だけのための一時的な金儲け提供に思えてならない。

　「淡路花博」は、もともと関西国際空港など大阪湾の埋め立てのためによってできた、広大な土砂採取跡地という自然破壊の見本のような場所に、震災にも対応した最新技術を駆使し斜面にまで植栽した、環境回復創造事業のお披露目のようなもの。こういった経緯であれば、「環境」がテーマでも興味深いものであったかもしれない。

　５年後の「愛知万博」でも「ハノーバー万博」と同じ「環境」をテーマとして開催が予定されている。この「環境」というテーマは、地球規模で人類が本腰を入れ出したのはここ十数年。「自然共生」などの技術も無しに、自然豊かな場所で開催すること自体が、まだ早すぎたのかも知れない。「淡路花博」の会場のように、自然破壊した場所を回復・再生する技術や、その破壊によって実際に起こった問題などを取り上げた方が、わかりやすいのではないか。
　テーマや立地等さまざまな問題を抱えている「愛知万博」だが、場合によっては、大幅な変更（開催地やテーマなど）しなければ、開催する意味そのものが問われることにならないか。ゆえに、「愛知万博」では、「ハノーバー万博」の問題を、反面教師としてこれからの博覧会のモデルとなる新しい解決アプローチ、そしてスキームを提示してもらいたい。もちろん、長期的な戦略性を持って、跡地利用の具体的な展開策を示す必要があるのは、言うまでもない。

以上

前ページへ　第二部トップページへ　次ページへ

空間通信
トップ

５．閉幕に際して

淡路花博」は、９月17日（日）に184日間の会期を終え、閉幕した。入場者数は、開幕当初の目標５百万人を大きく上回り、695万5,336人に達した。
「淡路花博」の話題を取り上げた新聞記事の情報を基に、閉幕間際から閉幕までの状況をお伝えする。

●９月３日まで、夜間開園（ナイター営業）のメイン会場となった「しおさい花園」に設置された、「光のオブジェ」が人気を集めた。これは、トナカイやカンガルー、リスなど動物をかたどった15体が電飾によって光るオブジェ。主催者の「夢の架け橋記念事業協会」は閉幕後、このオブジェを含む会場の備品の有効利用を図ろうと、県を通じて自治体などに譲り受け希望を募った。すると県内の病院や公園、公共団体などから申し出が殺到し、譲渡先の検討に頭を悩ましている。同協会は「個人や企業は対象外。できるだけ多くの人が楽しめるところに譲りたい」とコメント。

●会場となっている「国営明石海峡公園淡路地区」の開園が、2001年度末予定から一部早まり、年内にも無料開放される。これは、「淡路夢舞台」の集客策として、兵庫県が建設省に要望したもの。開放区域は「国際庭園」や「テラスガーデン」が並ぶ「フローラゾーン」（29ha）が中心になる見込み。公園の正式開園後は有料になる。

●会場内の足として活躍したトラム「ユメハッチ号」の獲得に、同じ淡路島の三原町が名乗りを上げた。同町では、2001年４月に一部オープンする「南淡路農業公園」（仮称）内を走らせる計画。2002年４月の本格オープン時には54haと県内最大規模となり、園内の池の周辺１kmを周遊させるという。主催者の事業協会も前向きに検討中。

●人気パビリオン「緑と都市（まち）の館」の世界最大の花「ラフレシア」をはじめとする貴重な植物標本などの展示物を、閉幕後「兵庫県立人と自然の博物館」（三田市）に保管してもらう方向で、交渉に入っている。

●会場を彩った花を来場者3,000人に閉幕翌日の18日にプレゼントした。混乱防止のために、12日から最終日17日までに、会場の総合案内所で毎日先着500人に整理券を配った。会場には600種類45万株の植物があるが、このうちの20種類を２，３株に分け、ポットに植え替え配布した。10年前の大阪花博では、閉幕間際に来場者が花を持って帰ってしまうことがあったため、整理券方式にしている。

●同事業協会によると、入場者の地域別内訳は兵庫県内が約30％、兵庫県を除く関西が約40％、中国・四国約11％と近隣地域で全体の８割以上を占めている。続いて東海約６％、残りは関東以北、九州などの遠来客だった。

●開催期間中、411件の会議が行われた「国際会議場」では、2000年内にさらに65件、2001年には90件の会議予約を確保しているという。今後は、「花博」の看板が使えなくなるだけに、「ウェスティンホテル淡路」とも連携した東京・大阪での営業など、新たな収益源となる会議誘致の工夫を検討中。

主催者は、閉幕後、備品や展示物を単に廃棄してしまうのではなく、来場者にプレゼントしたり、有効利活用のために自治体との連携を取り、多数の引き合いを得ている。さらに国営公園開園まで、「淡路夢舞台」の集客が先細りしないように、一部早期無料開園を実施させるなどの努力を重ねている。
ちなみに、「淡路花博」ホームページは閉幕後、大盛況の感謝を伝えるページに更新され、各ゾーンの思い出の写真と開催概要、入場者記録などが掲載されている。

最後に一般的な評価として、個人のホームページの感想を一覧表にまとめた。

評価対象	○	△	×
全　　体	●芝、花壇、池、川と自然が豊富 ●花がいっぱい見られてすごくいい。 ●山と海の両方の景色が楽しめて眺めは最高。 ●少しのスペースにも植物を植えてあり、お花のパラダイスという感じ。	●思ったより花が少なかった。 ●本当に花が好きな人のための博覧会。 ●思ったほど広くない。 ●かなり広く、坂道＆階段が多く、少々疲れる。	●遠い、混んでいる、ショボい。 ●どこへ行っても混んでいた。 ●造られた自然という感じで物足りない。
緑と都市の館		●入口が「ショートコース」と「じっくりコース」の２カ所あって、わかりにくい。	●２カ所ある入口の適切な案内がない。
ユメハッチ号			●歩行者と同じ通路を、歩行者を押しのけながら走る。 ●行った日は、４台中２台が壊れて、大混雑。 ●待ち時間は相当なもの。
花の館	●各ブーズはそれぞれ個性的で、おとぎの世界のようで見とれてしまう。		●百貨店の全国「うまいもの市」みたい。
アジアショーケース		●味の好みがあるが、日本にはない味が楽しめる。	●「大屋台村」と「大」を付けるほどではない。
国際庭園	●建物の造り込みも凝っていて、植物の色彩感覚がすばらしい。 ●ミニ旅行のようで楽しい。	●世界各国が凝縮されて、リトルワールドのよう。	●建物や彫刻の再現が、涙が出るほどショボい。
奇跡の星の植物館	●最もすばらしい施設。花と葉のカラーコントロールが絶妙。 ●建物が近代的立体構造でとてもきれいでおしゃれ。内容も子供からお年寄りまで楽しめる。		
百段苑	●エレベーター付きのバリアフリーを実現している。	●震災犠牲者の鎮魂墓地の様。 ●階段が多く、最上段まで上る人は少ないが、見る価値あり。	●この階段は、年寄りにはきつい。
アミューズメントパーク		●一通りの機器を揃えているが、花博と関係がない。	
しおさい花園	●海の青と花の色のコントラストがきれい。		

前ページへ　　第二部トップページへ

空間通信
トップ